

# 英語教育

## ENGLISH CLASSWORK

Vol. 62 No. 1 2010

主幹 佐野 正之

### 巻頭言

#### 今こそ教育の独立宣言を

横浜国立大学名誉教授 ● 佐野 正之

オバマ大統領の「チェンジ!」の呼びかけに応えるように、日本でも民主党が大勝し、政治が大きな変革のときを迎えている。教育分野でも、全国学力テストの見直しや教員免許状更新の廃止、大学院での教員養成、教育行政の地方分権化などが検討されようとしている。実現には時間が必要だし、途中には相当な混乱も予想されるが、基本的な方向は正しいと信じているので、期待をもって見守りたい。

しかし、心配がないわけではない。今回の教育政策の変更は、次の政権交代で再び見直され、混乱を生むことを覚悟しなければならない。つい最近でも、ときどきの文部科学大臣の気まぐれで、小学校英語は推奨されたり冷遇されたり、挙げ句のはて必修化され、そのたびに現場は振り回されてきたではないか。政権交代ともなれば、混乱ははるかに深刻だろう。ちょうど、「鬼畜米英!」と教えていた教員が、敗戦と同時に「平和と民主主義」を説かざるを得なかった事態にも匹敵する変革を伴うかもしれないのだ。

「教育は政治的に中立であるべきだ」という主張は正しい。だが、それがいかに困難かを日本の歴史は示してきた。そこで提案である。まず、現存の政党に「教育政策の論争に政党は介入しない」という協定を結ばせる運動を起こす。と同時に、教育者会議を設置する。その会議は、企業や親も参加はするが、教師や教育学者など教育のプロが主たるメンバーとなり、未来に向けて、日本や国際社会に貢献できる人材育成の大方針を打ち出し、「教育の独立宣言」として国会で承認を得るのである。

年金制度が政権ごとに変わるようでは安心した生活設計ができない。それと同様に、将来の日本の教育は、プロによる、長期的な視点に立った海図なくしては語れない。だがそれが認められるには、社会の教育に対する絶対的な信頼が不可欠である。個々の教師は、教育力を高め生徒の信頼を勝ち得ると同時に、協力して未来社会への責任を果たさなければならない。そのためにも「独立宣言」が今必要なのである。

## 4技能の総合を図る指導を目指して

徳島県鳴門教育大学附属中学校教諭 大牛 英則



### 1. はじめに

平成24年度からの新学習指導要領完全実施に伴い、中学校英語教育にも様々な点で改革が求められています。特に、言語活動の取り扱いとして第1学年では「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。」(下線は筆者による)と明記されています。

下線で示したような言語活動を取り入れるためには次の3点が重要であると思います。

- ・ 目標の一貫性
- ・ 指導法の系統性
- ・ 学習内容の系統性

### 2. プロジェクト型の授業

一般に、目標とする言語材料を習得するために、行く課題や作業を「タスク」と呼ぶとすれば、プロジェクトとは「場面を具体的に設定して何かをやり遂げるための計画・手順」と考えることができます。つまり、ある具体的な目的のためのタスクの集合体がプロジェクトだということができます。私は、何らかの目的を達成するために必要な言語材料を計画的に習得していくタイプの授業(学習スタイル)をプロジェクト型の授業と呼んでおり、新学習指導要領の趣旨を実現するためには非常に有効であると考えています。

例をあげて考えてみることにしましょう。

プロジェクト  
「短期留学で訪れるカナダの中学校の授業に参加し、中学生に自己紹介をしよう」

このプロジェクトを達成するために必要な言語活動とは、①名前、②出身地、③誕生日(年齢)、④趣味などを紹介することです。そこで、①を達成するためにはbe動詞について、②については前置詞fromの使い方、③については月の名前、序数、基数の言い方、④については一般動詞likeの使い方に習熟する必要があります。

つまり、①～④のそれぞれのタスクを達成し、何度も「読む・書く・聞く・話す」の活動を重ねることでプロジェクトの目的を達成できるというわけです。なお、プロジェクトの内容を設定する際にはできるだけ生徒の生活に即した内容を設定するようにします。

### 3. プロジェクト型授業の利点

このようなプロジェクト型の授業には次のような4つの利点があると考えます。

#### ・ スキル獲得に意味が生まれる

これまでの一般的な学習スタイルでは、それぞれの授業で取り扱う言語材料の理解にとどまり、その言語材料を使うとどのような活動が可能になるのかを生徒は具体的に理解しないままでした。ゆえに多くの場合、生徒は文法的な事柄を理解しただけで「できるようになった」と錯覚し、実際には必要な場面で学習した内容を使用して自己表現ができないという状況でした。

しかしプロジェクト型の授業では、目的の達成に必要な言語材料に習熟するためにそれぞれのタスクがあり、そのタスクを達成することによってスキルを獲得できることを系統立てて体験的に理解することができます。つまり、目的を明確にすることによってスキル獲得に意味を見出すことができるというわけです。

#### ・ 状況を意識した英語の活用の仕方になる

プロジェクトの内容を具体的に設定するとは、「自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から

### 〈4技能の総合を図る指導の工夫〉

簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題」を設定するというです。そうすることによって、生徒たちは対象の相手や環境などに配慮した自己表現をしなくてはなりません。

たとえば、自己紹介をする相手が学校の先生なのか生徒なのかで言葉づかい(使用する表現)は変わってくるでしょうし、教室の前に立って生徒全員に自己紹介する状況なのか、初対面の相手に1対1の状況で自己紹介するのかで声の大きさや話すスピード、目配せ、表情なども変わってくるでしょう。

つまり、このような活動は学習指導要領で言うところの「言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動」であるということです。

#### ・ スパイラルな活動が可能になる

これまでの学習スタイルでは、教科書で一度学習した内容は、取扱いの重複を避けるためでしょうか、二度と学習内容に取りあげられることはありませんでした。つまり、一度きりの学習で習熟したと見なされてきたといっても過言ではありません。しかしながら、先にも述べたように、その学習スタイルは文法事項の理解にとどまり、スキルの獲得にまでは至りませんでした。この原因は練習不足に他なりません。

これはあたかも、プールサイドで声高にクロールの泳ぎ方を説明したあとに「さあ、泳いでみろ」と言っているようなものです。実際には何度も泳いでみて、息継ぎのタイミングや手の回し方、キックの仕方など試行錯誤をくり返し、時には、コーチからアドバイスをもらいながら次第に上手く泳げるようになっていくものだと思います。

プロジェクト型の授業では、目的達成のために既習の学習事項を何度も使用する機会が作り出されます。これにより、生徒たちは必要に迫られて既習の学習内容を使用することになり、より確実にスキルの定着を図ることが可能になります。

#### ・ 意味のあるコミュニケーションの体験を記憶できる

これまでの学習スタイルでは、言語材料、とりわけ文法事項の定着を急ぐあまり、生徒にとってはあまり意味をもたない(必要を感じない)疑似言

語活動を授業の中で行わせようとしてきました。たとえば次のようなHow many ~?の疑問文に慣れさせるための会話練習です。

A: Excuse me. How many pencils do you have in your pen case?  
B: Ah... I have five.  
A: Thank you.  
B: You're welcome.

この会話練習で、生徒Aは生徒Bに対して筆箱の中に何本鉛筆を持っているかたずねているわけですが、なぜそのような質問をする必要があるのか意味を見出しはしません。単にHow many ~?を使う機会を疑似的に作り出しているに過ぎません。とすれば、どのような場面(文脈)の中でHow many ~?を使い、その答えに対してどのように反応すればよいのかを理解しているわけではないので、実際の場面で生徒がこの表現を使うことを期待するにはかなりの無理があります。

プロジェクト型の授業では、生徒たちは言語の使用場面と言語の働きを具体的に想定して、英語を使うこととなります。これは、これまでのような単なる知識としての文法事項を無理やり使う疑似言語活動ではなく、目的を達成するために必要な言語材料を生徒自身で取捨選択し、目的をもって使用することに意味があります。

このような体験は、生徒たちが将来これに似た状況に立ったときに体験の記憶として鮮明に思い出され、状況に応じて適切な使い方ができるようになると期待されます。

### 4. おわりに

学習指導要領が改訂され、小学校に外国語活動が導入されたことにより、中学校英語教育が果たす役割はますます大きなものになると考えます。

しかし私は、考えようによってはこれは大きなチャンスになるとも思っています。歯止め規制がなくなり、語彙制限も最低1,200語程度に引き上げられ、週3時間の授業時数も4時間に増えます。

これまでの既成概念を払拭し、生徒により確実なコミュニケーション能力をつけるためにも、私たちの様々な取り組みが求められると考えます。

## 授業で育てたい力とは？ ～コミュニケーションの素地を養う授業の工夫～

茨城県古河市立三和中学校教諭 天白 由美子



### 1. はじめに～授業で育てたい力を考える～

私たちは、授業で様々な方法をもって自己表現活動やタスク活動などを仕掛けます。幼少時代の遊び体験の中で試行錯誤が少なかったからでしょうか、生徒たちは壁にぶつかるにあきらめやすく、受動的で行動力の弱い面が多く見られます。そんな生徒たちのために私たちは教材を工夫し、ヘルプシートやワークシートを自作準備し、一人でも多くの生徒が授業時間内に課題を達成できるように苦心しています。わかりやすく丁寧に準備をすることで、活動はスムーズに進みます。「準備したかいがあったなあ…」と安堵する間もなく、疑念が浮かぶのです。「先生は工夫を重ねて賢くなっていく。でも生徒たちは果たして賢くなっているのだろうか？」と。

英語科において目指すべきものは、コミュニケーション能力の基礎。それは「生きる力」につながる「問題解決能力」を培うことにつながります。課題の累積する現代で共存していかなければならない生徒たちには不可欠なスキルですが、何か大切な土台が欠けている感があります。英語の授業においても4技能に注目するだけでなく、こうした力を養うことにも目を向けなければなりません。しかし、どのように養っていけばよいのか。そうした課題を抱え、この1年間を過ごしてきました。

### 2. 多くの生徒に見られる弱点を伸ばすために

上記のような思いから、コミュニケーションの素地作りのために、教科書を使った授業のルーティンの中で、学習において自分から求め、行動し、さらに創造的な活動へと展開できる力を育てる工夫ができないか、と考えました。

そこで、授業で生徒たちを観察していて、多くの生徒が弱いと感じる点をメモし、授業の要所に柔軟に生かすことにしました。

#### 「多くの生徒に見られる弱点」のメモ例

- ・論理力(物事の因果関係に疎い?)
- ・情報を整理・検討・管理する力(自分の状況

把握さえできていない?)

- ・質問や相談をして問題を解決する力(対人マナーも×。体験から生まれてほしい…)
- ・聞く→行動(視覚情報に頼りすぎ?)

以下、現在授業で工夫していることのうちの5点を紹介します。

#### (1) 対話と共有のある授業

新しい事項を取り上げるときは、関連・連想する事柄をたずねるなど、生徒といろいろな情報を共有する時間を大切にしています。授業のテンポ・リズムを大切にしていますが、単語の導入ではフラッシュカードの使用を止め、板書をしながら有用な情報やイメージ画を書き添えていきます。また、「常識としてわかっているだろう」ということも、あえて具体的に想像しやすいように説明します。既存の知識とのイメージ的なつながりを重視し、皆で思考の流れを共有することで、自分たちの世界につながっていくという実感が、記憶に結びついていくと考えます。その場の対話からおもしろい例文と価値のある着想が生まれることもあり、貴重な時間です。

#### (2) 自己管理する授業

単元ごとに自己評価カードを活用しています。自己評価カードとはいえ、大半が客観的な評価や課題達成の記録(先生のサインやシール)であり、簡易ポートフォリオ的な役割を果たすよう試行錯誤したものです。記録は「自主的」に「随時」もらうようにする習慣をつけています。そして、単元末にカードを回収し、カードの状況を見て、個別に助言をしています。「単元終了までにすべてのチェックを受ければよい」とし、個人の能力や都合によって柔軟に取り組めるようにしました。

#### 「自己評価カード」の項目

##### 【自分で記入】

- ①単元の自己目標 ②月日、曜日 ③ページとめあて ④小テストの記録 ⑤4技能取り組み自己評価 ⑥挙手・発表数 ⑦振り返りと英作

文 ⑧単元テストの得点 ⑨単元の振り返り

##### 【先生が記入】

- ①自習チェック(本文視写&和訳) ②課題達成チェック ③スピーチ評価 ④ワークブック評価 ⑤総合評価(ABC)

カードに記録が少ない生徒には、「できるか」「できないか」という能力の差ではなく、自己管理・自己責任による「やるか」「やらないか」の行動力の違いだということを強調し、友だちに支援を求めて頑張るよう助言します。課題を終えている友だちからの助けを得ながら、苦勞してAの評価を勝ち取り、その達成感と感謝の心が次の授業への意欲につながっているようです。

#### (3) 音読が活発な授業

始まりのあいさつの直後に、本文の音読を素早く行っています。一斉・ペアなど形式を巧みに変化させて、段階的にチャンクごとの日英読み、シャドーイング、ブラインド・リポートなど、いろいろな変化球を盛り込みながら難易度を上げていきます。段階的な練習と同時に、「教科書は手に持って」「ペアの相手に対する責任を感じよう」といった基本的なマナーをきっちり守らせています。活動は口頭指示で変化球を交えるので、生徒には指示を聞く集中力と緊張感があります。時に会話の状況や解釈を変え、感情表現も変えておもしろく読みます。こうした方法で発音指導から本文内容の復習まで10分程度で集中的・総括的に行っています。

#### (4) 模範解答のない授業

練習問題や単元・定期テストの答え合わせでは、模範解答を配付・板書せずに、「自分で調べる」(=書物から学ぶ)「友だちと相談する」(=人から学ぶ)という中で試行錯誤しながら、根気よく問題に向き合う機会としました。友だちと相談するために席を立つことも許しています。目標は「班ごとにOKをもらう」こと。誤答を見逃さないためにも最終チェックは必須です。誤答の箇所を線で引いて“Do it again!”と手渡すと「えっ!?!」「なんで?どこどこ?」と必死に考えてくれます。

#### (5) 自己表現できる授業:スピーチタイム

新学習指導要領にスピーチ活動が明記され、Prepared Speechのよさが見直されていることをうれしく思います。聞き手を意識して論理的に文

章を組み立て、プレゼンテーション・マナーを身につける訓練として、Prepared Speechはやはり最良です。題材を学んだときに原稿の下書きをノートに書かせ、そこからスピーチ用紙に清書し、暗記して全体の前で発表するまでを自主性を大事にして進めています。評価は原稿作成でも発表でもAをもらうまでやり直しはOKとし、下記のポイントについてABCの評価を与え、改善の指針としています。

#### スピーチ・シートに記載している発表のポイント

##### 【Writing】

- ①volume ②logic ③spelling ④grammar

##### 【Speaking】

- ①voice volume ②eye contact ③smile ④fluency

スピーチ活動導入時の工夫ですが、あらかじめGood SpeechとBad Speechのモデルを見せ、自己紹介など簡単な内容を十分に暗記させ、全体の前で“Hello, everyone!(Hello!)”, “Thank you for listening.(拍手)”と自主的にかつ楽しく発表する流れを体験させました。初期に全体発表のルールを作り、抵抗感をなくすことが鍵だと思います。

### 3. 成果と課題

現在勤務している古河市立三和中学校では「自己教育力のある生徒」の育成を教育目標とし、英語科では習熟度別少人数指導を実施しています。

現在、第2学年と第3学年を担当し、自助努力の雰囲気が築かれたこと、音読や発表に意欲的になり、予習に取り組む生徒が増えたことにうれしさを覚えます。

一方、「柔軟」な授業には「不確かさ」もあり、不安になる子もいます。いわば「薄暗闇を歩く」子どもたち。その周囲をすべて明るくするのはなく、足下とゴールを照らし、子どもたちが手を取り合って進む中で、徐々に周りが見え、自らの灯火がもてるように導きたいと考えます。「生徒たちが自立し、賢くなる授業」への試みはまだ初期段階ですが、現在の指導方針を続けながらコミュニケーション活動と関連させ、アクション・リサーチ等の方法で研究・改善したいと思えます。

## 4技能フル稼働の50分間

愛知県豊橋市立南陽中学校教諭 佐藤 充宏



### 1. はじめに

新学習指導要領において教科目標は「4つの技能を総合的に育成すること」とある。「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等を、自らの体験や考えというフィルターを通過させ、「話すこと」や「書くこと」で表現する。そこを到達点と考え、50分を少しの無駄もなく使い切るような授業実践をしている。

### 2. ウォーミングアップは5分刻み

授業の始まりは、5分刻みのトレーニングを行う。その日の授業内容にスムーズに移行できるように、以下の①～⑤の活動のうち、1～3つを選択して実施する。

①教師が発音したり、CDから流れてきたりする英文を聞き、要約等の問題に取り組む。

②英文を読み、筆者の述べたいこと等に関する問題に取り組む。

③英会話スキット(本校独自の英会話集English Fight, およびペアで考え出した独自のスキット)を感情を込めて表現する(話す)ことに取り組む。



気持ちを込めて話すぞ!

④与えられたテーマに対し、「事実・描写」と「感情・希望」を意識して、英語で表現する(書く)ことに取り組む(辞書は授業時に教室にカートで運び、生徒はいつでも使える状態にある)。



いつでも使えます!

⑤現在習っている文法事項についての確認問題に取り組む。

活動の終了は、キッチンタイマーが知らせる。時間内にできなかったところは、授業の終盤に設定してある「振り返りの時間(自分の弱点補強時間)」に行くか、家庭学習とする。時間内にできた生徒は、教師の指示を待たずに自分の伸ばしたいところを自分で見つけて学習する。

### 3. ピータータイム

英語特区である豊橋市は、週4時間を英語の授業に使える。そのうちの1時間は、英会話力アップに焦点を当てた時間である。各中学校に常駐するALTとのTTで教科書は使わない。本校はALTのピーターと共同立案した授業を行っている。話すことを中心にすえて、表現力を育成するために以下のような取り組みをしている。

①1～2分のピーターのスピーチを聞き、その内容を大まかにつかみ、英文でまとめる。または、スピーチについての質問をする。

②授業の初めにやっているトレーニングのEnglish Fightやオリジナルスキットを発表する(別室で実施)。ピーターはその評価を行い、生徒たちにアドバイスをする。

③英語のスピーチを発表する。「私の夢」「日本人の私が世界の問題を考える」等のテーマに沿って作ったスピーチを暗記して発表する。発表のときには絵、写真、小物等を使ってもよいとする。



私の英語通じるかしら?!

### 4. 使用可能な機器等はすべて使う

生徒が英語を学ぶ環境を可能な限りよいものにするために、授業時に教室に以下の道具を運び込んでいる。



これが英語グッズ!

①カート:「生徒用の辞書40冊」,「CDプレーヤー」,「ピクチャーカード」,「授業で使うプリント類」,「英会話関連の本」,「多くの参考資料」等を乗せてある。

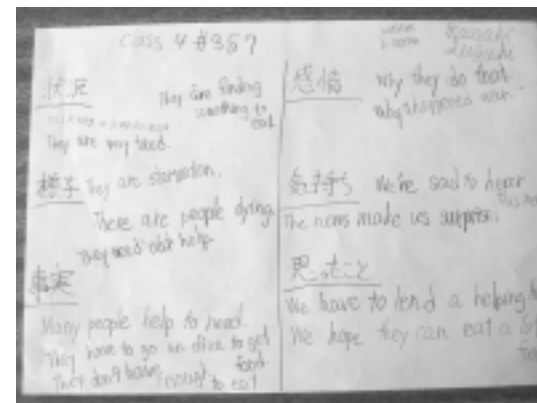
②移動黒板:正面黒板にはコンピュータ用の提示スクリーンが貼り付けられるため、文法事項の説明等は移動黒板にあらかじめ書いておき、提示する。

③コンピュータ, プロジェクター, スクリーン:各教室にLANが設置されているので、コンピュータを最大限活用する。

・教科書の内容提示, 発音練習, 練習問題に取り組むソフト(デジタル掛図等)を使う。

・パワーポイントで作った「文法説明」や「詩」,自分で作ったビデオ教材を提示する。

・インターネットにも接続し,文字や映像(YouTube等)の資料を提示する。



世界の抱える問題をインターネットの英語ニュースで聞き、それに関する「状況・様子」と「感情・思ったこと」を意識して分けて英文に書いた。その際、ペア学習という形で取り組んだ。

### 5. 「English Fight」 & 「オリジナルスキット」

本校には、1～3年生までその学年に合った内容の英会話表現集がある。その総称がEnglish Fightである。1年生は、Quick Q&Aが3課とBasic English Fightが3課。2年生から本格実施され、2年次に5課、3年次に5課ある。内容は、「ホテルのチェックイン」「友人と昨晚見たニュースについての話」等、様々な状況を想定してある。基本的には、授業開始のトレーニング時間を使って、

### 〈4技能の総合を図る指導の工夫〉

「音読→完全暗記→自分たちなりに工夫する(文の変形)→発表」の流れで行う。

オリジナルスキットは、与えられたテーマに沿ってペアで辞書を使いながら、より独創的なスキット作りに挑戦するものである。添削を受けた後、完全暗記して発表する。

### 6. 僕の・私の授業日記

生徒は授業の終わりに、毎回必ず授業日記を書く。その日の授業は理解できたのか、疑問点はあるのか、日々の英語学習で困っていることはないか、次の授業のときの目標は何にするのか、家庭でどんな学習をするつもりか等、内容は生徒がそのときに書きたい内容を書く。

日記には必ず朱書きを入れ、授業が始まる前に生徒に返却する。生徒たちとよい人間関係が生まれ、生徒の英語学習への意欲を高い状態に保つことができる。また、その日の授業の良し悪しが手に取るようにわかるので、次の授業の改善に役立つ。朱書きでは答えきれない質問をしてきた生徒には、休み時間に廊下等で直接答える。



どんなに忙しくても愛の朱書き入りで返却!

### 7. おわりに

生徒たちには無限の可能性がある。また、生徒が探している答えは、生徒自身で見つけ出すことができる。その信念のもと、教師はその環境を可能な限りよいものにする。授業中、生徒が常に自分で考えて行動している(聞く+読む→話す+書く)状況を設定したい。

## 「英語で書く」につなげるために

鹿児島県鹿児島市立吉野東中学校教諭 野間口 晴美



### 1. はじめに

中学校1年生の初期の段階で、「英語授業の中で難しいと思うことは？」と問うと、「英語で書くこと」と答える生徒が少なくない。

学習指導要領の改訂において、外国語科の目標が音声によるコミュニケーションを重視することから、4技能をバランスよく育成することを求められるようになった。現学習指導要領にあげられている音声によるコミュニケーション重視という点は、小学校での外国語活動の必修化により、小学校でその素地が育成されることになる。しかしながら、「音声に十分慣れた中学校1年生」は、中学校の英語学習に入り、アルファベットなどの文字や単語、文などを書くことにおいてスムーズに取り組めるだろうか？

そこで、中学校1年生の1学期から2学期の時期において、「英語で書くこと」に対しての苦手意識を払拭させるために、他の技能と関連づけさせながら取り組んだ授業の実践を紹介する。

### 2. 楽しく覚えよう、フォニックス！

「聞くことから書くこと」へつなげるための一つとして、フォニックスを理解しているかどうかはとても重要である。そこで、4月の授業ではフォニックスを徹底的に教えることにした。しかしLenneberg(1967)が唱えた言語習得における「臨界期」があるように、臨界期を越え始めた中学1年生ともなると、どうしても[kʌt]=k(c)というような音から文字への理解を自然に受け入れられない生徒も見られ始めた。フォニックスの授業が苦痛に感じているようであった。

「フォニックス授業=楽しい」とするためには、ALTの力を大いに借りた。小学校で英語活動に慣れた生徒たちは、ALTの先生が来るとなるといつも以上にワクワクする。そのワクワク感を利用して、Team Teachingによるフォニックスカルタや

しりとりなどのゲームを行った。

ALTによるネイティブの発音を聞いたり、生徒が文字や単語を発音したりしてフォニックスの音を知り、最後にまとめとして、フォニックスを使って文字を書く練習をした。生徒たちはひらがなの[か]を[か]と読むことにおいて何の疑問もないように、ALTが「クッという音はkやcのことだよ」と言えば、自然に納得した。また、カタカナで[ア]と表記してしまいがちなaやuの音も、それらを区別して発音例を示すことで、フォニックスが実際に使われている身近な言葉のきまりにつながったようだ。ネイティブスピーカーが与える生の英語の力は大きい。

### 3. 何回読めるかな？ 教科書音読！

「英語で書く」ためには、「英語を読める」ということも必要である。そのために、最も身近な教材である教科書をすらすらと読めるようにさせたい。1年生といえば、「英語活動=ゲームができる」と思っている生徒が多いことから、活動を「ゲームをしている」と思わせることができれば、意欲的に取り組むのではないだろうか？ そこで、マンネリになりがちな音読練習をゲームとして実践した。

#### ～音読ゲーム～

- ①制限時間30秒～1分(文の量に応じて設定)
- ②読めた回数だけ、ポイントゲット！

ゲームについては、「制限時間があり、得点もらえる」、「教科書を時間内にたくさん音読し、達成できたらポイントを与える」とした。この活動を行う前には、教科書の文を正しく読めるよう、教師の後についてのコーラス・リーディングやクラスメートとのペア・リーディング等をくり返し行う。これらの音読活動はその後に行うゲームのために必要なことなので、生徒は必死に取り組む。速く、たくさん読むことを目標とし、とにかく口

### ＜4技能の総合を図る指導の工夫＞

を動かす、声を出す、くり返すという作業を行わせた。

読めた回数をポイントとして与え、「ポイントカード」にチェックする。ゴールまで行けば、「英語の宿題1ページお休みクーポン」がもらえる。英語があまり好きではない生徒は「宿題が1回休みになる！」と、とても喜んで練習する。しかしその結果、教科書本文が読めるようになってしまう。そうすると練習もおもしろく感じ始め、最終的には「人よりポイントを貯めたい！」というよい競争心をもって授業に取り組むようになった。

### 4. 速くたくさん書こう、ディクテーション！

上記の音読練習の後に、ディクテーション活動を取り入れている。

#### ～ディクテーションの方法～

- ①教科書の基本本文を用いた文を書く。  
※目標：30秒～1分以内に5文程度書く。
- ②教科書本文をディクテーションする。  
※目標：教師が1文につき5回程度読む間に、書きとる。
- ③難しい単語をディクテーションする。  
※目標：1分以内に1つの単語を20回目指して書く。

時間内に速くかつ正確に書くという作業は、日本語であっても難しい。まして英語ともなれば、なおさらである。しかし、そこは訓練！回数を重ねるうちに速く正確に書くことができるようになる。さらに、ディクテーションをするときには「自然な大きさの声で英文を言いながら書く」ように指示し、それにより、自分がその文を言えるかどうか確かめられる。

時間内に決められた文を決められた回数ディクテーションできると、生徒に「英文を書けた！」という小さな達成感が生まれ、また何回も書くことで文の構造が理解しやすくなるようだ。

#### (生徒感想より)

英文を写したり、聞いて書いたりしたら(英文が)頭に入っていく。

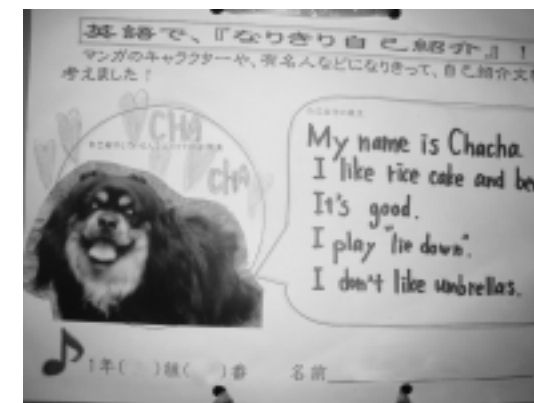
この訓練をくり返すことで、生徒自身が、英文を自分で作成するための基礎的・基本的な言語知識のインプットを実感できたようである。

### 5. 自分以外を紹介しよう、「他己紹介」!

上記の音読練習やディクテーション活動を通して、英語で書くことにおいて生徒の興味・関心が増してきた。新学習指導要領が唱える「自分の考えなどを書くことができる」という目標に向けた取り組みをしようと、2学期半ばには英語による「他己紹介文」を作成させることにした。

紹介する人物はアニメのキャラクター、芸能人など、生徒に興味のある題材を設定させ、資料や語句の準備も行わせた。興味をもって取り組んだ結果、オリジナリティあふれる作品を完成させることができた。

#### ＜「他己紹介」作品の1つ＞



### 6. おわりに

これらの活動を通して、英語学習初期の中学1年生にも「英語を使っている！」という実感を与え、書くことにおける不安を多少なりとも解消できたようだ。

今後は5語以上の英文を5文程度のまとまった文章としてすらすらと書くことができる力につなげられるような英語授業の実践を目指して取り組んでいきたい。

#### 参考文献

- 文部科学省. 2008.『中学校学習指導要領』
- 文部科学省. 2008.『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 小池生夫. 1994.『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 大修館書店
- Lenneberg, E. 1967. *Biological foundations of language*. New York: Wiley and Sons.



## 英語サムライ道場って何？

～Big Riverの活動について～

岩手県矢巾町立矢巾中学校教諭 石積 康弘



### 1. 設立の経緯

岩手に新しく生まれた研究会の活動をご紹介します。名前はBig Riverです。平成19年2月に実施した一つの研究授業をきっかけに40代の英語教師の有志数名で立ち上げました。20代の頃から研究面で切磋琢磨した、昔の仲間が集まりました。最初は数名だった会員も、今では80名ほどになりました。英語教育に興味をもつなら誰でも会員になれます。現場の教諭だけでなく、教育委員会の指導主事の先生、大学生、大学教授、高校の先生、校長先生、民間の英語に携わる方々など多岐に渡ります。研究会の目的は「岩手大学時代の恩師、大沢先生の教えを若い世代に伝える。教師の哲学を伝える。自分たちの腕を磨き合う」。自由な研究意志をもつ熱い想いにあふれた研究団体です。岩手県のどの地区の先生ともメールで交流でき、質問や情報交換、教材の共有化など今までにない効果が表れており、他教科の先生方からも注目を集めています。現場と行政の一体化です。これも過去に例を見ません。

### 2. 活動内容「サムライ道場」

平成20年1月に第1回研究発表会「サムライ道場」が開催されました。Big Riverが主催する研究会には「道場」の名前がつけられています。休日開催にもかかわらず、80名以上の参加で盛り上がりました。あの熱気は忘れられません。夏と冬にサムライ道場を開催。今年の1月で5回目となります。

〈第1回 サムライ道場の風景〉



発表者は立候補、推薦、様々ですがテーマも自分で決め、主に自分の実践、興味をもっていることなどを発表。サムライ道場はワークショップ形式の参加型の発表が多く、参加者も実際に実践方法を体験しながら効果を実感できます。研究会後の感想には多くの驚きの声を書かれます。発表内容は「学力アップの魔術師」「ヴィジュアルを活用してイキイキ授業～Touchしてみませんか」「中学校に外国語活動がやってくる」など、他の研究会では見られない、斬新でその先生らしさが発揮できる、ワクワクするようなテーマが多いのも特徴です。各発表の様子は、自作のワークシート、指導過程などを参加者を生徒に見立て、授業を再現。翌日から自分の学校で実践できるものばかりです。

普段はメーリングリストで互いに話題を提供しています。「ワークシートやテスト問題の提供、読解指導ポイント、文法指導の工夫、帯活動の提案、楽しいWarm-Up、授業の指導案」など日々メールで情報交換しています。今は大学生の皆さんも数名参加。授業を見た感想や質問などを寄せています。とても嬉しいことです。



〈全中学校に配布されるサムライ道場の案内〉

### 3. Big Riverのこれからの目標

特に20代、30代の若手教員、小学校の先生、他県との交流など、盛り上げていきたいものです。事務局は盛岡市立下橋中学校の鈴木泉教諭。他県の皆さんの参加も大歓迎です。英語教育に関するいろいろな情報、ご自身の最新の実践方法、あるいは素朴な疑問などがありましたら、お問い合わせください。



## 文法授受のための口ずさみチャンツ

東京都板橋区立西台中学校主任教諭 田中 大助



### 1. 言語の本質

1992年、ある出版社の編集長としてMITを訪れた私は、チョムスキーの功労を称えた受賞講演に出席した。慶應大学院の天津由紀雄教授司会の質疑応答で、直接質問に答えていただき、たいへん感銘を受けた。

そもそも、言語は、生得文法を通し、親から愛情を受けて、授けられるものであり、外国語の文法項目もその域を出ない。たとえば、天津教授が示すのを待つまでもなく、どの言語文化においても受動態などは幼少に獲得される。言語獲得が外国語学習に応用できる所以である。

### 2. 外国語学習

実際の授業では、演繹的なアプローチで文法用語を振り回しても、ほとんどの生徒にはちんぷんかんぷんであるし、反対に、単に多数の例文を挙げて帰納的な文法習得を狙っても、不完全な文法認識に終わるというジレンマに陥る。

そこで、幼児の一瞬の言語獲得を可能にする生得文法のような、だれもがピンとくるコア・イメージの提示が必要とされる。たとえば、前置詞のonは「上」でなく「接触」だし、中1で習う進行相の現在分詞と中3で習う後置修飾はまったく同じもので、どちらも形容詞的だという具合に。

それでは、中学校で最初に習うbe動詞のコア・イメージとは何であろうか。もともと存在をあらわすbe動詞(不完全自動詞)は主語の存在や有り様を表現する。

I am here.	私はここにいます。
It is there.	それはそこにあります。
It is a pencil.	それは鉛筆で(あります)。
It isn't a pen.	それはペンではありません。

一般動詞(他動詞)で初めて、主語と他の対象との関わりが表せるようになるのである。

I have a brother.	私には兄弟がいます。
I like my brother.	私は兄弟が好きです。

つけ加えておくと、進行相の叙述や受動態に用いられるbe動詞の本質に変わりはない。

### 3. 授受する文法

ある数学の先生によると、日本人は風呂を通して数学の基礎が授受されていたそうだ。例の「いちい、にい、さあん、しい、…」である。余談になるが、今、日本の折り紙を初等教育に導入したり、九九よりも大きな数までチャンツすることを当たり前とするインドの技術者に現在日本のコンピュータ会社が頼っている現実がある。

さて、前述の理論を英語学習に生かし、授受する文法をめざして、実際の授業のウォーミング・アップに使っている「口ずさみチャンツ」の一部を下に示すが、これらは助動詞や過去時制などへと系統的に応用・発展される。たとえば、助動詞のcanなどへの応用はとてもシンプルで、何度も練習をくり返す必要がないぐらいである。チャンツを行う際には、発音はよいに越したことはないが、子へ伝えるような思いで抑揚をつけられたい。「口ずさみチャンツ」の導入により、理解されない用語使用も陥れる問題練習もいらなくなった。オーバーラップさせてくる素直な生徒の声に、親の思いのような愛おしさを感じる毎日である。

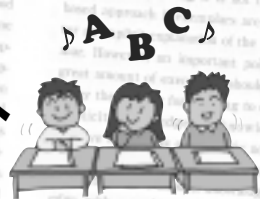
さて、生得文法の探求に終わりはなく、生徒の犯すミスこそ修正のための宝庫であり、常にフィードバックを怠ってはいけないと自戒している。

〈「口ずさみチャンツ」の抜粋〉

I am ~.	Am I ~?	I'm not ~.
You are ~.	Are you ~?	You aren't ~.
Jane is ~.	Is Jane ~?	Jane isn't ~.
She is ~.	Is she ~?	She isn't ~.
John is ~.	Is John ~?	John isn't ~.
He is ~.	Is he ~?	He isn't ~.
English is ~.	Is English ~?	English isn't ~.
It is ~.	Is it ~?	It isn't ~.
We are ~.	Are we ~?	We aren't ~.
You are ~.	Are you ~?	You aren't ~.
They are ~.	Are they ~?	They aren't ~.
I like ~.	Do I ~?	I don't ~.
You like ~.	Do you ~?	You don't ~.
Jane likes ~.	Does Jane ~?	Jane doesn't ~.
She likes ~.	Does she ~?	She doesn't ~.
John likes ~.	Does John ~?	John doesn't ~.
He likes ~.	Does he ~?	He doesn't ~.
The cat likes ~.	Does the cat ~?	The cat doesn't ~.
It likes ~.	Does it ~?	It doesn't ~.
We like ~.	Do we ~?	We don't ~.
You like ~.	Do you ~?	You don't ~.
They like ~.	Do they ~?	They don't ~.

## 第1回 小学校英語活動から中学校英語教育へ

—新学習指導要領における語彙の指導—



鹿児島大学教授 樋口 晶彦

## 1. はじめに

小学校における「外国語(英語)活動」が5, 6年生において年間35単位時間の活動としていよいよ2011年4月より全面実施されることになった。これは外国語(英語)活動が、従来の「総合的な学習の時間」の枠から外れた「領域」において実施されることや、小学校外国語活動の目標などから判断すれば、教科化へ大きく前進したものと考えられる。

文部科学省の2007年12月の調査によると、全国の小学校の97.1%(2007, MEXT)において英語活動は実施されていて、その数値は現在さらに増えていることが予想される。しかし、活動内容、頻度、担当者などは、学校間、さらに地域間においても格差が存在して、そうした格差が現在小学校英語活動における問題の一つになっている。

「英語ノート」の取り扱い方一つにしても各小学校間で温度差があり、多くの小学校が試行錯誤しながら苦闘しているのが現状のようだ。したがって、現在の「総合的な学習の時間」における小学校英語活動が中学校の英語にどのような実質的な影響を与えたのかとか、2011年の新学習指導要領導入後にどのような影響を与えるのだろうかなどに関しては、もう少し今後の推移に注目する必要がある。本稿では、小学校での英語活動を中学校英語へどのように生かすのか、「語彙の指導」を中心に考えてみたい。

## 2. 経験時数を踏まえた文字指導

小学校外国語活動の「指導計画の作成と内容の取り扱い」における配慮事項や、文科省の「小学校英語活動実践の手引き」においても「英語の文字と音声を同時に媒体として意思の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとっては負担が大き過ぎて、英語嫌いを生み出すことにつながる」として文科省は指導においては極めて慎重な態度をとっている。

しかし、多くの研究報告や小学校教育現場から

の意見を総合しても、すでに文字指導はかなり実施されているのが現状ではなかろうか。小学校英語活動においては、経験時数を踏まえたうえで、書く指導も少し負担にならない程度に導入してはどうだろうか。高学年児童になると絵カードを見て発音するだけでは満足しない子どもがいたり、英語の音声に慣れ親しませるゲームだけの学習では子どもたちの知的好奇心を満たさないからである。実際、鹿児島県の小学校でもそうした例は少なくない。6年生ではそれまでの学習経験を生かして自分の身の回りの単語であれば書く活動を取り入れることで興味を示すようである。では、何をいつどのように指導したらよいのだろうか。

## 3. フォニックスの導入

小学校英語活動では、まずフォニックスを文字や語彙指導の前に導入したい。少なくとも5年生の2学期後半くらいから英語の音に親しみをもってきた頃からの導入を提案したい。フォニックスの導入で英語の音声に対する興味・関心が高まるのが考えられるからだ。フォニックスはT.P.R.(Total Physical Response)を取り入れて小学校低・中学年からでも実施可能だと考えている。まずフォニックスの導入で英語の音声に対する「予測力」を育てたい。

## 4. 語彙の導入

## 4.1 PowerPointを導入した視覚的方法

語彙の導入ではまず視覚的方法がある。これは、絵カード、写真、地図、実物、フラッシュカード、ジェスチャーなどが考えられる。これらは語彙のスペリングと音声との連結に役立つもので、入門期の学習者への代表的な指導法である。現在では、PowerPointのアニメーションを含めた語彙の提示など、PCを導入して学習者の視覚に印象づけることもできる。小学校英語活動では絵カードやPowerPointを使用して単語レベル(single word)から導入しても、中学では学年進行につれてcar

→ big car, building → tall buildingなどのように意味のかたまり(chunks)として提示して学習者の言語処理を複雑にすることで記憶の定着を深めたい。

## 4.2 言語学的方法

語幹(stem)の指導から接頭辞、接尾辞など語形成の指導や、同義語、反意語、文脈からの指導、コロケーション、関係を明確にした指導、(たとえば、December comes after November., Mary is Tom's sister. Tom is Mary's brother. etc.), さらに言い換えや定義を与えた指導方法などが考えられる(米山, 2002)。新出語の導入は印象深く記憶に残るような指導を工夫することによって記憶の痕跡が深くなり、知識が定着しやすいと考えられている。

しかし、この言語学的方法は入門期や初級の学習者にとってはまだ難しい。基本的な語彙の知識がまだ限られているからである。したがって、初級学習者にはまず語彙学習を第一義的に考える語彙の「意図的学習」が必要であり、徐々に読解や聴解を通して副次的に語彙を学ぶ「偶発的学習」へと進めることである。Nation(2001)はこの意図的学習における単語カードの利点を述べているが、紙幅の都合上ここでは割愛する(折田, 2007, p.77を参照のこと)。

## 5. 記憶定着への工夫

## 5.1 Recall法

語彙指導は単なる機械的な反復練習ではなく、単語を見て意味を想起させたり意味から単語を想起させたりするrecall法が記憶の痕跡が残りやすいと考えられている。したがって、機械的に単語を10回書かせるよりも5回は意味から単語を想起させたり、単語から意味を想起させたりすることが記憶の定着には寄与すると考えられている(折田, 2007, p.80)。

## 5.2 身近な語彙の使用

さらに、韓国の初等学校英語教育や米国の大学における日本語教育においても見られる語彙指導の一つは、クラスメートの名前や地元の地名を多く取り入れたコミュニケーション活動である。このような身近な語彙や人名、地名を導入することでコミュニケーション活動は学習者にとってより身近で現実的なものとなり、教室内のコミ

ュニケーション活動が活性化する。韓国初等学校ではICTを導入して楽しみながらこの言語活動を実施している。

## 5.3 語彙テストの工夫

語彙テストは一回のテスト語数を少なく、複数回実施することを薦めたい。中学の初級学習者に対しては絵や写真などを含めて単語としての定着をまず図る。そして次回に同一語句をテストするときはテストの間隔を空けて実施することを求めたい。そして、学年の進行につれてhigh on a hill, go straight down, pretty young ladyなどと単語から意味のかたまりとして提示してみようだろうか。言語処理を複雑にしていくことで「メンタルレキシコン(心的語彙)」の定着を図るのである。断続的に1週間後、2週間後と間隔を空けて実施することを薦めたい。

## 6. 統合的コミュニケーション活動

新学習指導要領では、聞く、話すだけではなく4技能を有機的に統合的に含めた活動が求められている。ここでは、語彙指導を中心としたCrossword Puzzle, Bingo Gameなどが考えられる。“You can eat this vegetable in summer. The color is red. What am I?”などの質問は、生徒たちがグループにおいて複数作成して、英語で書いて口頭で質問して、他の生徒たちはそれを聞いて口頭であるいは書いて答えると4技能を含めた活動へとつながる。こうした活動はESL圏で出版されたテキストにおもしろいものがよく見られる(ex. Hangman)。

## 7. 終わりに

語彙の指導は、受容語彙(読解、聴解において意味がわかる単語)、発表語彙(書く、話すにおいて使える単語)の両方とも指導が必要である。語彙指導の研究は比較的歴史が新しいこともあり、今後の研究成果に注目したい。いかに印象づけて、興味深く、学習者の長期記憶に定着させようのか、その辺りの仕掛けが語彙指導のポイントの一つのように感じている。

## 参考文献

- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: CUP.  
 折田 充.(2007).「第5章 語彙の指導」『21世紀の英語科教育』(樋口晶彦, 島谷浩編著) 開隆堂出版  
 米山朝二.(2002).『英語教育-実践から理論へ-』松柏社

### 1. はじめに

中学校新学習指導要領における言語活動の指導事項に、「(聞くこと)まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること」や「(話すこと)与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が新たに示された。そこで本稿では、前もって原稿を準備して取り組むスピーチの指導例を紹介する。

### 2. 指導手順

#### (1) スピーチのテーマを与える

生徒の学習段階や興味・関心に合わせたテーマを与える。My Dream, My Story, My Treasureなどの“My～シリーズ”や学校・日常生活などに関する話題や出来事、体験などが取り組みやすい。

#### (2) スピーチのモデルを見せる

教師(JTE, ALT)の実演や先輩生徒の発表ビデオなどを見せる。そうすることで、生徒はアウトプットへの見通しをもつことができる。

#### (3) スピーチの内容を考える

テーマについてのキーワードを書き出し、構想を練らせる。“Hello, everyone. Today I'm going to tell you about my dream.”など、スピーチの始まりを与えると書きやすくなる。自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように、一つひとつの文を正確に書くばかりでなく、文の順序や話の展開なども考え、スピーチ全体に一貫性をもたせるように個人指導を重ねる。

#### (4) 発表の練習をする

①まず、自分で何度も声に出して練習させる。その際、「正しく伝えるための声」を考えさせると、「明瞭な話し方と適した声量」を意識するようになる。難しい文や発音しにくい語彙があれば、他の言い方に換えるなどの工夫をさせるとよい。

②「聞き手」を設定する。2人1組になり、お互いに「話し手」と「聞き手」になって練習させ

る。互いの立場から発表態度やスピーチ内容などについてアドバイスをすることができる。たとえば聞き手から「この内容が興味深かった」とか「もっとアイコンタクトがほしい」「ここではもう少し説明が必要では？」などの指摘により、話し手は「より正しく伝える」ための改良や工夫を加えることができる。パートナーを代えて練習をくり返した後、4, 5人のグループになり、互いに発表の練習をさせる。話し手は徐々に複数の聞き手の反応を見ながら楽しく話すことに慣れていく。

#### (5) 聞き手の理解を助ける工夫

スピーチの内容に合わせて、絵や写真、実物、図表、音楽などの活用を考えさせたい。聞き手も話し手もますますスピーチを楽しめるだろう。

#### (6) 発表本番における留意点を確認させる

練習を重ねると、発表時に気をつけなければならないポイントが見えてくる。①発声(声量)、②発音、③話すスピード、④表情(単調にならず、変化のある話し方)、⑤発表時の姿勢や態度、⑥聞き手への目配り(アイコンタクト)などについて、自分が最も留意しなければならない項目を確認させ、「相手に伝える」という目標達成へと向かわせる。

#### (7) 互いのスピーチについて評価し、学び合う

発表についての感想や意見を聞き、自己評価と相互評価をさせる。ノートなどに書かせたり、感動したり興味をもった内容についての意見交換や質疑応答をさせたりする。互いに認め合い支え合って取り組んだという「充実感」が、次の活動へのエネルギーとなってクラス全体を元気づける。

### 3. おわりに

計画的に指導を行い、スピーチの楽しさを全員の生徒に体験させたい。「クラスの前で発表してドキドキした!」と言いながら、きっと生徒は輝いた笑顔を見せてくれるものである。

# 「強勢」を重視した発音指導と音読テストによる「発話活動」の促し



北海道 静内高等学校教諭 大塚 徹

本校で私が受け持つ2年生の英語Ⅱの授業では、授業時間内に音読テストを行っている。リスニングが上達する条件として「英語を自然な速度で正しく発音できる」ことがあげられる。自然な速度で正しく発音できる単語は音声として流れてきたときに、耳がしっかりキャッチすることができるからである。逆に何回リスニング活動を行っても、正しく発音できない単語は、キャッチすることができないので、理解につながらない。どうしても「読む・書く」重視になりがちな高校英語の授業にあって、少しでも習った文章を「発話する」ことを通して「話す・聞く」活動につなげたいと思い、数年前から音読テストを実施している。しかし、ただ何の発音指導もなしにやみくもにテストを実施してもそれで生徒の発音が上達するわけではない。そこで、次の点に留意した指導を行っている。

日本人学習者はどうしても一つひとつの発音の正しさにこだわりがちだが、コミュニケーションが成立するうえでより大切なことは、文レベルでの強勢である。いわゆるsuprasegmentalsである。日本語というsyllable-timed languageで育ってきた高校生にとって、英語というstress-timed languageの言語はなじみが浅いものだが、その違いを説明する責任が我々英語教師にはあるだろう。その英語の特徴を説明するために4月の授業開きの際に、また生徒が英語の文につまずきがちな際、次のように板書して説明することにした。

[英語]

- ① I have some apples.
- ② I will have some apples.
- ③ I will have had some apples.

[日本語]

- ① 私はりんごを食べます。
- ② 私はりんごを食べるでしょう。
- ③ 私は(その頃には)りんごを食べ終わっているでしょう。

英語でもその訳である日本語でも、書くと長さは①～③のように違う。日本語は話す場合でも同じで、①よりは②を、②よりは③を話すほうが時間がかかる。一見当たり前のように聞こえるこのルールも、英語には当てはまらない。英語の①～③で、これらの文を話すのにかかる時間は大差ないからである。最初は生徒も困惑顔だが、手拍子で3回手をたたくうちに文を言えることを、発音しながら私が示すと納得する。つまり多少の文の長さではなく、英語はストレス(強勢)が大切で、強く発音する単語もあれば弱く発音する単語もあり、強弱をつけるためにはlinkingが必要であることも、これによりスムーズに説明することができる。

このような発音指導を日頃行いながら、年に4回の発話テストを実施している。手順は以下の通りである。

- A. 一人ずつ廊下に呼び出し、教科書本文の指定箇所を読む。
- B. 制限時間は30秒とする(こうすれば40名のクラスでも1時間で終わる)。
- C. 読み終わったらまずほめて自信をもたせる。
- D. それから今後の課題として、個々の発音・強勢、それに姿勢・態度・ジェスチャーについてアドバイスする(これらの評価の観点は事前に生徒に周知しておく)。
- D. 生徒はテストを受けたら教室に戻る。
- E. 待っている生徒は自習課題を行ってチャイムと同時に提出。

強勢を重視した発音指導、そして音読テストを通じて、生徒には「発話することの大切さ」を実感してもらいたいと願っている。

※ご意見・ご質問はnakata2004112000@yahoo.co.jpまでお願いいたします。

#### 参考文献

P. Avery and S. Ehrlich. (1992). *Teaching American English Pronunciation*. Oxford University Press.

## 温故知新

『漫画四人書生』(The Four Immigrants manga) という12コマ漫画の漫画集がある。作者はヘンリー・木山こと木山義喬(1885-1951)。彼は明治37年(1904年)、19歳のとき絵画の勉強を志してサンフランシスコに渡った。いわゆる就労留学生である。当該漫画集では明治末期から大正末期くらいまでのアメリカ西海岸における日本人苦学生の様子を漫画仕立てで克明に描いている。その中の一つにこういうのがある。

ハウスボーイの口を紹介された日本人苦学生チャーリーは、英和辞書をズボンの後ろポケットにしよばせて雇用主であるアメリカ人家庭のドアをたたく。初仕事はジャガイモと玉ねぎの皮をむくこと。しかし、主婦の言っていることが聞き取れない。そこで、“PLEASE PLEASE.”(原文ママ)と言って主婦に紙を渡す。主婦は“I SEE. YOU ARE SMART BOY. CAN YOU READ ENGLISH”(原文ママ)と言って用件を紙に書いてチャーリーに渡す。

チャーリーは持参の英和辞書を引いてしばらくの次第を理解する。日本では英語が得意であったチャーリーである。そこで、どうして言っていることがわからないのだろうかとぼやく。

私はふと思うのである。「リードル」一辺倒の当時ならばさもありなんが、「コミュニケーション」重視の今でも状況はあまり変わらないのではあるまいかと。ひょっとして、当時だから辞書を引けば理解できたが、今では辞書を引いても(たたいても)理解できないのではあるまいかと。

これまで幾度となく学習指導要領が改訂され、そのたびに教科書が改訂されてきた。昨今の流れはコミュニケーションということで、しかもオーラルが重視されてきた。一方で、骨のある英文を読むことや文法重視の指導法が英語の話せない日本人を生み出す要因とされ、見るも無残に教育現場から排斥されてきた。

この傾向は大学の一般教養の英語でも同様である。今や、英米の小説や随筆などを読むようなケー

スは稀になった。「原書」などはもってのほかで、中高のやり直しを目的としたリメディアル教材が好評を博している。諸悪の権化とされる〈受験英語〉の世界にどっぷりと浸かってきた世代には少なからず違和感を覚える。

しかも、いわゆる〈実用英語〉とされる試験のための教材を見てみると、受験英語世代ならば難なく解いたであろう内容ばかりである。ところが、今の大学生にはこれが難しいようだ。リスニングはリーディングよりは得意のようだが、受験英語世代でも少なくとも彼らくらいの点は取れたと思う。問題なのは、リスニングの SCRIPT を読ませてもわからない学生が多いことだ。ということは勘に拠るところ大ということであろうか。

私が知るところ、昨今の大学生の大半は語彙力の貧弱さに加えて基本的な〈英語の形〉がわかっていない。したがって、いくつか記憶にある英文(その数は極めて少ない)は言えるのだが、自ら簡単な文を作り出すことすらできない。大学全入の時代、入試というチェック機能が崩壊してしまった。このままの状況が続けば、オーラルを含めた英語力のさらなる低下は確実である。

私はこれまでの教科書がいけなかったとはまったく思わない。第一に改定すべきは外国語としての英語に対する我々の意識の問題だと思う。いったい、我々は学習者に何を期待するのか。相変わらず、〈自然〉な英語を〈自然〉に操れるようになることを期待するのか。日本語の生活環境下で、それが不可能であることをこれまでの英語教育が実証している。そろそろ頭を冷やして、〈日本人にとっての英語の規範〉を真剣に論議すべきであろう。「ネイティブのように英語が話せないんです」と私の目の前で泣いた女子学生がいたが、彼女に罪はない。(明海大学教授 小林 健)

## 投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2010年3月、5月、9月、2011年1月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。